

## 支援者部門受賞者

精神障害者の福祉事業所と18年にわたり交流、子どもたちの啓発と当事者の地域参加を応援

会津若松市立川南小学校

【福島県会津若松市】

「思いやりのある子ども」を育成するという教育目標の一環として、精神障害者福祉事業所「ほっとハウスやすらぎ」との交流を18年にわたり実施。さつまいもとラベンダー栽培、田植え、クラブ活動、学習発表会など多彩なプログラムを展開している。子どもたちは精神障害に対する先入観を持たずに当事者とつながりを持ち、当事者は交流活動を通して人との接触に自信を持つようになっている。「地域で共に生きる」教育活動のモデルであり、アンチスティグマにつながる活動として高く評価された。

### ●川南小学校の取り組み

「ほっとハウスやすらぎ」との交流は、川南小学校の教育課程に組み込まれ、全児童が6年間で様々な活動を行う。1・2年生はさつまいも植え、3・4年生はラベンダー栽培、5・6年生は田植えと稲刈り。「ほっとハウス」からは25名ほどが参加する。学習活動の他にも、収穫物を一緒に食べる「自然に親しむ会」や、子どもたちが中心となって企画する「家庭科クラブ」などを展開。卒業前の「お別れ会」では、6年生が歌を、「ほっとハウス」のメンバーがお弁当袋を互いにプレゼントする。精神疾患について、授業で教えることはない。「実際の交流のなかで、子どもたちは学習で得る知識以上のことを学んでいます」と渡部好純校長はいう。



収穫したお米は、「自然に親しむ会」でおいしく食べる。「一緒につくった芋煮がおいしかったです」(2年生)  
「来年は田植えを一緒にがんばりたいです」(4年生)

### ●交流活動の始まり

交流が始まったのは2000年。当時の校長が「ほっとハウス」に声をかけてスタートし、校長が代わっても受け継がれてきた。交流がきっかけで看護学校に入学したり、ボランティアとして「ほっとハウス」を訪れたりした卒業生もいるという。



渡部校長(左)と、「ほっとハウス」やすらぎ副理事長の西川しのぶさん(右)。「川南小との交流がきっかけでメンバーの就労意欲も高まり、一般就労した人もいます」(西川さん)

### ●子どもたちの声

子どもたちにとって「ほっとハウス」のメンバーは、1年生の時から一緒に活動してきた顔見知り。近所のスーパーや通学路で会えば、気軽に声をかける間柄だ。「当時担任していた5年生が『ほっとハウス』の方々に自然体で接している姿を見て、積み重ねの結果だと思いました」と、現在の交流活動担当の長澤秀弥先生は着任当時に振り返る。

### ●活動を続けること

保護者も積極的に見学し、活動に参加する人も多い。初めは恥ずかしがっていた「ほっとハウス」のメンバーも、子どもたちに進んで話しかけるようになっていくという。例のない活動だと言われることもあるが、「特別な活動だとは思っていませんでした」と渡部校長は笑う。「保護者の方も地域の方も、川南小の取り組みをよく理解してくださっています。これからも、(地域の人と)信頼関係を築きながら、活動を続けていきたい」(渡部校長)



「家庭科クラブ」は校内で大人気。上級生の様子を見て、活動を楽しみにしている下級生も多い。